



ART RAMBLE

学芸員の視点	②③
こどものための美術鑑賞術について——遊免寛子	
特別寄稿	④⑤
南宗気分——島田康寛	
ショート・エッセイ	⑥
平成19年度の新収蔵品について——江上ゆが	
トピックス	⑦
ムンク展関連行事	
「美術館の日」イベント	
「南画って何だ?! 近代の南画	
—日本のこころと美」展関連行事	
美術館の周縁	⑧
海の上で会いましょう——小林 公	

漆黒の闇の中、美しい巻き毛の女がこちらを見つめています。その頬から首にかけては、あろうことか皮膚を剥ぎ取られ、グロテスクな筋肉の束が露になっているではありませんか。生き人とも死人ともつかぬ麗人が口を開くや、「Omnes una manent nox. Memento mori.」、ホラティウスの詩句と中世ヨーロッパの金言が、まさに金色の帯となって空中に浮かび上がります。豊穡な夜の世界が幕を開ける瞬間です。

栃木県日光に生まれた柄澤^{ひとし}齊は、高校卒業後に上京し、日和崎尊夫の木口木版画と出会います。木口木版画とは、一般的な板目木版画とは異なり、ツゲなどの硬木を輪切りにした断面(木口)にビュランで繊細な線を刻む技法です。19世紀のヨーロッパでは、主に複製版画の分野で盛んに用いられました。この技法に魅了さ

れた柄澤は、創形美術学校版画科在学中の1972年に日本版画協会展に初出品して以来、1973年に同会新人賞

コレクションから

を受賞、1977年に日和崎、城所祥らとともに木口木版画家のグループ「鑿^{のみ}の会」を結成するなど、ジャンルを代表する作家として旺盛な活動を続けています。

ここに見るのは、中期の代表的作品集と見なされる『死と変容』の冒頭を飾る一葉です。これを皮切りに、脳髓や虹彩といった人体の一部から無限に広がる宇宙空間まで、極小と極大を自在に行き交う壮大なメタモルフォーゼの旅が始まります。

(岡本弘毅/当館学芸員)



柄澤齊(1950~)

すべてを一つの夜が待つ 死を思え (『死と変容』第1集 夜より)

1986-88年

木口木版、箔押し・紙

13.5×21.2cm

平成19年度美浦康重氏寄贈

こどものための 美術鑑賞術について 遊免 寛子



会場風景

2008年度のコレクション展は、ご家族そろって楽しんでいただけるよう「こども」や「親子」を対象に、様々な趣向を凝らした展示を3期に渡って実施する予定である。その第1弾となるコレクション展Ⅰでは「絵とはなそうーたんけん!はっけん!美術館!」と題して、美術作品の鑑賞を初めて体験することもたちが、楽しみながら所蔵作品に親しめるよう、色々な仕掛けを配した展示を行った。私は、こどもたちへの教育普及を担当する立場として、「特集 こどものための美術鑑賞術」の展示を担当したが、その中で感じたいくつかのことについて触れたい。

今回の展示は、今年度のコレクション展の方針に従い生まれたものである。近年、当館では、学校の団体鑑賞を中心に、児童・生徒の来館者数が増加しているが、来館者全体に占める割合はまだ少ない。社会教育施設としての美術館の使命や役割を考えると、こどもたちへの教育普及活動が如何に重要かということが改めて認識されるところだろう。勿論、当館では前身の近代美術館開館当初から、学校と連携した出前授業や団体鑑賞を実施したり、鑑賞と制作を含んだワークショップを開催したり、夏休み期間中のこども向け展覧会を実施したりと、全国的に見ても先進的且つ活発な教育普及活動を行ってきた。ただ、今回のように年間を通じて「こども」や「親子」を対象にコレクション展を展開したことはこれまでに無く、それ故、今回のコレクション展の特集を任されたことは、私自身にとっても大きな挑戦であった。

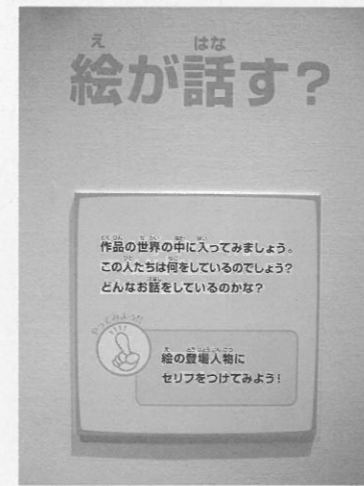
展示プランを立てる段階において、最も頭を悩ませたのが、その切り口である。特に、今回の展示は3期に渡るコレクション展全体の基準になるであろうことが予測されたため、美術鑑賞において最も基本的な要素である「みる」という行為に焦点を絞った。その背後には、展示室にて私が目撃してきた、鑑賞者と作品とのあまり幸福とは言えない数々の出会いと別れの場が存在している。作品を鑑賞する際、とりわけ抽象的な作品に対しては、実に多くの方が、鑑賞の基本である「みる」という行為の不確かさに戸惑われ、困難を感じられているようなのだ。それは、『絵の見方がわからないから、美術館へ行って面白くない』という、私達が頻繁に耳にする言葉に凝縮されていると言えるだろう。長年に渡り、美術作品を鑑賞することは、美術の学習をすることとダイレクトに繋がっていた。それは感性を養う以上に教養を高めるものとして存在していたのである。そのような歴史的背景が先の発言に繋がっている事は疑いようもないが、80年代、ニューヨーク近代美術館を中心に、教育理論や実践を活かしたプログラムが開発され、これまでの鑑賞方法は異なる、より自由な鑑賞方法が提案された。そこで重視されたのは、知識ではなく作品と出合った時の鑑賞者ひとりひとりの感じ方であり、作品及び他の鑑賞者との対話である。その後、日本においても、美術館が一方向的に鑑賞方法を押しつけないユニークな展覧会が開催されるようになった(注1)。これらの展覧会に特徴的なのは、視覚的な情報を楽しむ前に先入観や知識を与えてしまうキャプションを廃し、それを補

完するものとして会場での対話型ギャラリートークを組み込んでいるということである。そこには、鑑賞者同士が対話することにより作品の本質に迫る対話型鑑賞法のエッセンスが取り入れられている。しかし、そのような自由な鑑賞方法には、鑑賞者とスタッフとの人的交流が欠かせない。知識や文字情報に拠らない鑑賞法は、「みる」という行為を重視するが故に、その「みる」きっかけをつかめない人にはかえって不親切に思われてしまう危険もあるし、ひとりで楽しみたい人には適切でないかもしれない。実は自由というものは不自由で、一見不自由なものの中に自由があるのかもしれない。

そのような先例を参考に、今回の「特集 こどものための美術鑑賞術」では、わかりやすい言葉で、鑑賞方法の基礎と作品の楽しみ方を6つご紹介した。6つのコーナーには、それぞれ「やってみよう!」という名前の、来館者が自由に参加出来るツールを準備した。まず会場に入ってすぐの案内文にて、作品の見方に正解や不正解などなく非常に自由なものであるということを確認しつつ、オススメの鑑賞方法を具体的にご案内した。そうすることによって、鑑賞方法がわからないから、「みる」という行為そのものを放棄してしまうという、悲しい別れを避けられるのではないかと考えたためである。その上で、鑑賞の基礎である、作品と作品との「比較」方法を6つご紹介した。まず、最初は、具象的でストーリー性のある作品に台詞を付けるコーナーである。今回、取り上げた清水登之の《テニス・プレーヤー》は、当館が誇る名品であり、コレクション展の中でも、よく目にすることが出来る馴染み深い作品であるが、作品の登場人物に台詞を付けてみるという行為は、実はかなり多くの方がすでに試みたことがあるのではないだろうか。今回は、それをワークシートに記入してもらおうという積極的な働きかけをすることで、絵の中の世界に入り、その中で自由に楽しむという鑑賞方法を提案した。遊びの要素が強すぎるように感じられた方もあったかもしれないが、それが作品を「みる」きっかけとなるであろうし、それが作品の理解に繋がると考えてのことである。その他、アルバースの作品をみて、色の楽しみ方を提案する「いろいろな色」、ピカソと浜田知明の線で描いた顔を見て、線の表現の面白さを



会場入口にて作品の見方を紹介



コーナーごとに配した「やってみよう!」パネル



清水登之の《テニス・プレーヤー》に台詞を付けてみるコーナー



元永定正さんの作品の前で、絵本を読むこどもたち

紹介する「ひとふで顔」、円形を使った作品を比較してお気に入り投票する「〇い絵」のコーナーや、リアルだけれどなんだか不思議な「不思議発見」のコーナーなど、色・形・モチーフ等さまざまな要素を取りあげ、作品の楽しみ方を紹介した。そして、最後は「元永定正さんの世界」と題して、当館の所蔵作家のひとりであり、こどもたちには絵本を通して身近な存在でもある元永定正氏の作品を見比べるコーナーを用意して、ひとりの作家の作品の変遷と根底に流れる普遍的要素を感じてもらい鑑賞術のまとめとした。また、元永さんのコーナーには絵本を絵の前で読めるようにし、日頃絵本に親しんでいるこどもたちが、美術作品の中にも元永さんの色と形を発見することにより、美術館にある作品が身近なものになることを願った。そこには、この展示を通して、美術館が遠い存在ではなく、日々の生活に潤いやアクセントを与えるような存在となしてほしいという思いがある。

また、今回の展示では、こどものための展覧会ということで、作品とキャプションの高さを通常より低めに展示したり、漢字にルビを振ったりという基本的な工夫の他に、各コーナーのタイトルに色文字を使ったり、パネル類のデザインを工夫したりと視覚的要素にも力を注いだ。また、こどもたちがくつろぎながらワークシートや作品パズルに挑戦できるカーベットや制作用の机を設置することにより、「やってみよう!」の体験が気軽に出来るようにした。また「やってみよう!」には専用のロゴマークとボードを用意し、2室以降にも対応。コレクション展Ⅰの主担当である小林学芸員との二人三脚により、1階の展示室全体がひとつの統一されたカラーで多様に展開した。なお、会場内で挑戦していただいたワークシートは、展示室外にあるエレベーターホールの掲示板にてご紹介し、鑑賞者同士の交流のきっかけとなったこともご紹介しておきたい。そこから、対話型ギャラリートークで体験できるような、それぞれの感じ方の違いや面白さも味わえるだろう。この展示はこども向けに企画されたものとはいえ、実際展覧会が始まってみると、こどものみならず意外に大人の方の参加者が多いことに驚いたが、それは、今後の教育普及活動のヒントともなるひとつの重要な結果であったといえる。様々な要素が盛り込まれ、これまでのコレクション展から大きく生まれ変わったか



「やってみよう!」のワークシートに挑戦できる制作用の机

のような印象を与える今回の特集であるが、実は、これまで積み重ねられたコレクション展と当館の教育普及活動の成果であるということをごここで強調しておきたい。例えば、「ひとふで顔」のコーナーは、近代美術館時代に、江上学芸員が企画した「夏休みの美術館 線を探しに」(注2)が土台となっているし、アルバースの正方形シリーズのワークシートは、吉田学芸員の「こどものイベント」から生まれたものである。また、会場に設置したマグリットの《マ・メール・ロフ》のバズルは以前服部学芸員が制作し好評だったものである。

ただ、今回の展示にも当然いくつかの問題点があったことも事実である。鑑賞者が体験できるような仕掛けに対しては、特に先生方を中心に、いろいろと改善点やアドバイスを頂戴した。それは、教育的意義より、きっかけとなることを優先させた結果でもあるが、簡単に体験出来る反面、作品の本質まで導くところまで至っていないというのは大きな反省点である。また、体験に夢中になって、作品を「みる」という鑑賞の基本的かつ重要な要素がおろそかになっているケースも散見された。それでは、まさに本末転倒である。また、展示の対象年齢とニーズのズレもあった。こちらは低学年を想定して企画したが、実際にご来館いただく割合が高かったのは未就学児とその保護者であり、そのズレが想定外のハブニングを生み出したという点も見逃せない。今回の反省点を活かし、今後更なるパワーアップを図りたい。

(ゆうめん・ひろこ/当館学芸員)

注

- (1) 例えば、「なぜ、これがアートなの?」1998年、豊田市美術館・川村記念美術館・水戸芸術館、「MITE!見て!」2007年、川村記念美術館・岡山県立美術館など。
- (2) 「夏休みの美術館 線を探しに」2000年6月23日(金)~9月17日(日)
なお、この展覧会では、神戸市小学校教育研究会図工部と連携して、展覧会を題材にした授業用の事例集を作成し、神戸市内の全小学校に配布。会場内にも参加型コーナーを設置し、線で顔をかける「ピカソに挑戦」コーナーが好評を博した。



展示室前のエレベーターホールに設置した掲示板

南宗気分

島田 康寛



〈信貴山縁起絵巻〉部分 信貴山朝護孫子寺

「南画」とは、中国の文人画を指し、その精神を日本に伝えたのが、室町時代の「南画」である。南画は、中国の文人画を指し、その精神を日本に伝えたのが、室町時代の「南画」である。南画は、中国の文人画を指し、その精神を日本に伝えたのが、室町時代の「南画」である。

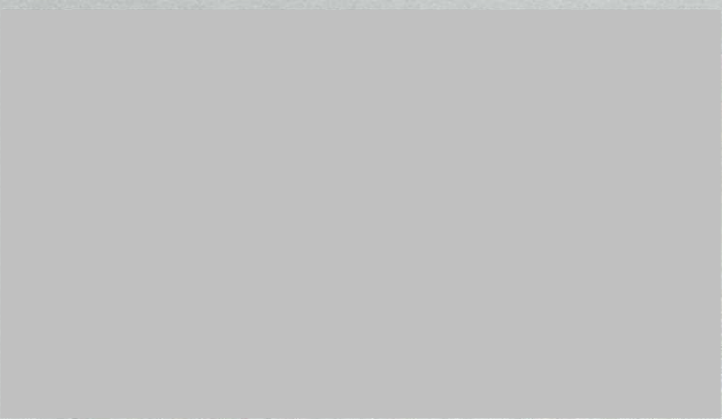
本稿の依頼を受けた時、「南画」には以前から心惹かれるものがあったから簡単に引き受けたのだったが、さて、と取りかかり始めると、何から描き始めてよいのやら、そして何を書くべきなのか、ということに迷ってしまうことになった。というのも、問題があまりにも大きくて、また複雑だからである。「南画」ということを中心に、「南宗画」と、その対概念である「北宗画」、また「文人画」という言葉がぐるぐると頭の中を巡り、その上「文人画」についても中国のそれと日本のそれが、また、近代において現れてくる「新南画」という言葉と一緒に、その渦は数を増すとともに複雑に絡み合ってより大きな渦に成長し回転し始めるからである。今迄にも幾つかの本を読んだりしたことがあるのだが、この際と思って改めて読み返してみても、人によってその説くところは微妙に違い、これらの言葉の概念がいつも曖昧なままなのである。そういう意味では、その曖昧さこそが問題なのだとも思われて来たりするのである。

とはいえ、それらの説を私なりに整理してみると、「南宗画」「北宗画」の区分は明末の董其昌らが明の宮廷画院およびその流れを汲む画家たちを攻撃し、自分達が社会的・商業的に優位に立とうとする意図から、禅宗の南頓北漸になぞらえて唱えた尚南貶北論であり、歴史的事実と整合しない画系が創り上げられたと言うこと。その違いは、南宗画が水墨でぼかす渲染という技法を用い、素人で土気を持つ利家の手になるもので、簡略粗放で軽淡清雅をよしとし、文人的教養を伴った人格表現を重視するのに対し、北宗画は細かく輪郭をつけて描く刻画という技法を用い、玄人で匠気を持つ行家の手になる細密巧緻、濃厚豊麗なもので、技巧に基づく客観主義の立場に立つと言うこと。南宗画が江南の湿润平遠な風景と無関係でなく、平淡天真で素直な描写によるのに対し、北宗画は華北の厳しい山水を構成主義的に描くとも言えること、などである。以上のことから推測出来るように、この南北論は基本的には様式論の筈ではあるが、その一部に制作者についての言及も含んでいることが「文人画」との関係を複雑にしている。中国における「文人画」というのは、儒教や詩文の教養を備えた士大夫の素人画を指し、様式に囚われない自由な表現法によって、自己の胸中にある境地を表現するものである。ところが、日本には中国における士大夫に該当する階級がなく、実際に文人画を描いた画家において、初期の祇園南海や柳里恭は幾分近いとしても、池大雅や与謝蕪村などはもちろん、浦上玉堂や田能村竹田らでさえ士大夫に比すことは出来ないし、彼らの在り方は職業画家的である。ただ、精神的に自由な立場にあり、様式に囚われないこと、心境を画笔に託す態度によって、南宗画の系統に含めて解釈するしかない。おそらく、そんなことから新たに生まれたのが「南画」という日本の名称である。日本において「文人画」が「南画」とほとんど同じ意味で用いられて来たのも、このような事情からである。

前置きが長すぎたようだ、本題に入らねばならない。そんな「南画」が江戸時代を通じて流行し、明治15年のフェノロサの「美術真説」を機に中央画壇から追われるまで一大勢力を形成していたのだが、注意しなければならないのは、その後も地方に潜みながら命脈を保っていたことであり、大正期に入って画壇のあちこちから復活の芽を吹き始めた事実である。このことに関して、すでに、明治末から新しく流入してきた印象派以後の西洋の美術思潮との関係において説かれてきた。すなわち、非自然主義に立つ芸術、言い換えれば後印象主義、表現主義、象徴主義、フォーヴィスム等々における主観表現と、「南画」の精神的・様式的自由さと心境表現あるいは人格主義という立場における共通性に目が向けられたからである。フェノロサが南画(文人画)を否定したのは、自然の客観的描写を主としない一点については「稍賞すべきものある」としながら、その目的とするところの妙想(Idea)は絵画の妙想ではなく、文学の妙想だから真の絵画とはいえないという理由であった。造形芸術としての絵画の純粋性を前提に日本絵画の近代化を提唱するフェノロサにしてみれば、詩書画一致などという曖昧なものは否定しなければならない代物だったのである。これを逆に見れば、フェノロサは南画の本質を正しく理解していたのだとも言えるのだが、そんな南画の在り方が大正期になって見直されたとも言えよう。

当時の代表的な美術雑誌の一つ『中央美術』が大正6年の7月号を「南画研究」号としたのは、時宜を得たものと言うべきで、巻頭言は「新南画の気運動く」というものであった。「南画愛好者に裨益を与へようとするのが如き単なる目的のみによるのでない、吾人は之れを芸術界の要求に応ずる為の喫緊事であると信ずる」とし、「国士崇拜と詩趣玩味との二方面から」南画愛好の伝統勢力は残るが、彼らは新気運の原動力でなく、「真の南画を創作せんとするものは南画の教習を経ざる青年芸術家と覚醒した少数の大家とである。而して之れ等の大家また南画以外の地に育った人のみである事に興味もあれば教訓も宿つて居る」と続けている。ここで挙げられているのは先駆者の一人というべき今村紫紅をはじめ、横山大観、寺崎広業らの大家、結城素明、平福百穂、橋本閑雪、富田溪仙、安田靉彦、小林古径、小杉未醒、満谷国四郎、森田恒友らの少壮作家で、それぞれ北画系、四条派系、大和絵系、洋画系と南画系ではなく、その思想と手法も異なるが、「真に南宗画人の精神に参じて詩人的感情を語らんとする点が一致して居る」と説き、彼らを中心として或いは直流として「新しい南画を作らんとする運動が事実になりつゝある」と書いている。そして、この動きの原動力となったのは明清画を中心とする南宗画の研究が始まったこと等の影響であるとも指摘している。

ところで、この『中央美術』には中川忠順、沢村専太郎、木下空太郎、相見香雨、笹川臨風などの評論家、石井柏亭、小杉未醒、津田青楓、中村不折、平福百穂、



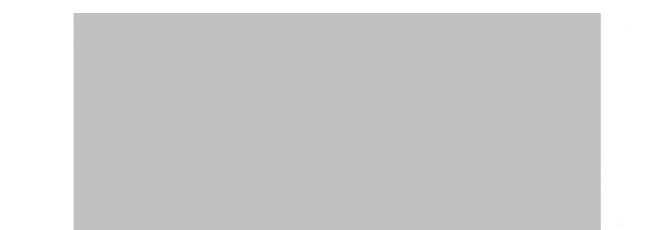
山本丘人〈鳥と風月〉 昭和47年 成川美術館



浅野均〈高原風光〉 平成11年

寺崎広業、小坂芝田などの画家その他の文章が掲載されているのだが、私が最も共感することが出来たのは、これまであまり注目されてこなかった吉川靈華の文章である。「古画に現はれたる南宗気分の意義」というもので、南北の区別については地方的差異と認めず、思想的差異としてきたのは明代以後のことだが、この二潮流は「遙かに古き時代に其起源を見出すことが出来る」として、周の時代に行われた老荘や孔孟の二派の異なる思想は、元来中国に存在する二大系統の思想の表れで、これらは種々の要素が加わって時代とともに変化しながらも継続しており、これが芸術にも根本的の二大系統を生じさせたのだと言うのである。しかも、「東洋の絵画は、元来南北宗なる相対的の名称の起らざる遙かの古代に於いて、南宗的思想によつて第一歩を投ぜられたものではあるまいか。そしてそれが後代に迄及んだもので、即ち南宗の気分のもので、東洋画の正統と称す可き性質のものであらうと思はれる。無論此処に言ふ南宗の気分といふのは、北宗を予想せざる時代の絶対的気分を指すので、北宗思想は恰も物語などに於ける挿話の様に、或時代を画して起り、或時代を画して消滅して居るので、南宗思想は其前後にそれを挿さんで、終始一貫した系統を保つて居る」と。そして、「此南宗以前の南宗思想は、人類の有せる芸術の良心から、最も正しき発足をしたものと言ひ得るものであらう」と続けている。さらに、その類似性のために「南画」＝「文人画」という誤った解釈が行われていることに言及し、「文人画を広義に見れば、決して一貫した伝統や、派などのある可きものではない。つまり文人画は南宗が多いといふ事は出来るが、南宗画は文人画であるといふのは原始的意義の研究が徹底しない為ではあるまいか」「そして独立の存在を標榜す可き、堂々たる一国の芸術が、文人の余技に過ぎない貧弱なものを以て、最も高尚な画派として代表せらるゝに至つては、大いに心細からざるを

得ないではあるまいか。絵画は、決して余技や道楽の仕事では無い。王侯に対するの芸術である。宗教に対するの芸術である。科学に対するの芸術である。文学に対するの芸術である、であらねばならぬ」と、靈華にしては珍しく強い言である。さらに、南北の違いについて、「此区別を儒学の所謂王道と霸道の儀によつて解釈したいと思ふ。儒学の説によれば、王道坦々平なること砥の如しとある。これが抑々芸術としても尤も正しき出発点で、古代の南画思想は即ち之を本体として起つたものだと思ふ。前にも述べた如く、こゝに言ふ南画思想は北画以前の絶対のものであるが、後に興つた五代宋元の北宗画は、之に対して霸道である事は、誰でも心注ぐ処であらう」として、以下、実際の作例を挙げている。その内から日本のものを紹介すると、正倉院御物中の「楓蘇芳染螺鈿槽琵琶」の桿撥絵や「鳥毛立女屏風」「麻布菩薩図」、「過去現在絵因果経絵巻」、東大寺蔵の「華嚴五十五所絵巻」、「信貴山縁起絵巻」などであり、「だから自分は常に土佐派を以て我国の南宗であると唱へて居る。之を要するに、我国には南画の唱導されざる遙かの以前に於て、南宗気分の幾多の傑出したる作品があつた。……自分はこゝに重ねて言ふ、現代に於ける南宗研究の勃興は、実に衷心から喜ぶ可き傾向である。願はくはそれが根本的であり度い、東洋芸術の根本観念としての南宗、即ち北宗を対象とせざる絶対の南宗思想の真の意義を闡明しなければならぬ」と結んでいる。



竹内栖鳳〈春雪〉 昭和17年 京都国立近代美術館

少々長くなったが、以上が靈華の説の概要である。私は、この靈華の説くところに本質的なものを感じざるを得ない。そして、いわゆる「新南画」と呼ばれる大正期に現れた美術現象を見るに、一部の心ある画家たちが、言葉としては発していないとしても、靈華と同じ思いからあの試みに取り組んだのではないかとさえ思われるのである。目を転ずれば、京都画壇の指導者であった竹内栖鳳にもその作品には確かに南宗気分があり、市隠のような晩年を送ったあの村上華岳などは当然同じ線上に連なっている。それは戦後の混乱を経た現代においても変わらず、山本丘人や浅野均などの作品にも現れている。彼らの意識に南画というものがあつたかどうかは別として、いつの時代にも深いところの画家の作品には靈華の言う南宗気分は不死鳥のように姿を変えて現れてくるのだ。東洋芸術の根本観念たる所以である。

(しまだ・やすひろ／美術評論家・立命館大学文学部教授)

1945年奈良県に生まれ、1968年関西学院大学文学部を卒業。
奈良県立美術館学芸員、京都国立近代美術館学芸課長などを経て現職。
京都府立堂本印象美術館館長代理を兼務。
近代日本美術を専門とし、「京都の日本画」「東西の巨匠たち」「長谷川潔」「明治の京都洋画」「変容する美意識」「村上華岳」など著書多数。

平成19年度の 新収蔵品について

江上ゆか

ショート・エッセイ

コレクション収集は、美術館のもっとも基本的な活動のひとつである。人間の社会と同様、新しいコレクションが加わることでコレクション全体が活性化し、その意義もいっそう深まってゆく。とはいえ美術館をとりまく諸事情は、相変わらず厳しい。残念ながら一昨年度に続き昨年度も、当館では美術品の購入を行うことはできなかった。さいわい関係者のご厚意により、19年度は37点の作品と資料1件を、寄贈という方法でコレクションに加えることが出来た。

県立美術館である当館は、地元ゆかりの深い作家による美術作品の収集に力を入れている。昨年度は、作例の少ない初期洋画の貴重な一点から、国際的に名を知られた画家の代表作まで、県ゆかりの作家に関するコレクションを特に充実させることができた。

桜井忠剛(1867～1934)は、川村清雄に油彩画を学んだ関西初期洋画壇の重要な画家の一人であるとともに、初代尼崎市長をつとめるなど地元では為政者として知られている人物である。漆に油彩で描かれた《能道具図》は、師川村の影響を強く受けた桜井の画風を示すとともに、裏面の書き込みによって旧蔵者が知られる点でも貴重なものである。

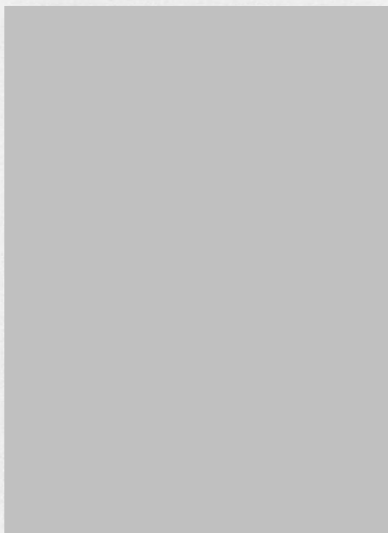
鈴木清一(1895～1979)は茨城県に生まれ東京美術学校に学んだ洋画家で、1930年に神戸に移住、兵庫県美術家連盟の中心人物として活躍した。1921年の第3回帝展に出品、初入選となった《初秋の丘》は、鈴木の出世作と言える。翌年にパリで開催された日仏交換美術展に出品された後、行方不明となっていたが、近年本作の所蔵者が自宅を改築する時に偶然発見、作者のご遺族に連絡をとられたことで所在が明らかとなった。

田村孝之介(1903～1986)は1924年から約35年間神戸に住み、自宅の研究所で後進の指導にもあたるなど、神戸の洋画壇に大きな足跡を残している。同い年の洋画家小磯良平とは、とりわけ親交が深かった。当館は小磯については記念室を有しながら、田村の作品はこれまで版画1点の収蔵にとどまっておりましたが、このたび戦後間もなく描かれた3点の人物画をコレクションに加えることが出来た。

長らくパリを拠点に活躍した菅井汲(1919～1996)は、神戸の出身である。当館では既に菅井の作品20点余りを所蔵していたが、絵画については1973年以前の作品に限られていた。昨年度80年代と90年代の大作1点ずつを新たに収



桜井忠剛《能道具図》油彩、漆・板 39.1×135.5cm



田村孝之介《ミンと女》1948年 油彩・布 72.7×53cm

蔵し、幾度か画風に大きな変化を見せている菅井の全体像をよりよく伝える方向にコレクションを補完することが出来た。なお1点のご遺族から、もう1点は当館の活動を継続的にご支援いただいている財団法人伊藤文化財団から上述の桜井や田村の作品とあわせて、寄贈いただいたものである。

さらに県内作家によるものとして、2006年に開催した「山田脩二の軌跡—写真、瓦、炭…展」の出品作より、当館内の特徴的な建築空間である「光の庭」にあわせてつくられた淡路瓦によるユニークなインスタレーションを作者の山田脩二(1939～)氏より、また版画家川西英(1894～1965)の小品を作者と交流のあった医師の遺族より、寄贈いただいている。

当館では広く内外の彫刻と版画の収集にも力を入れている。清水九兵衛(1922～2006)による抽象彫刻とレリーフ計6点はご遺族から、また本号表紙でも紹介している柄澤齊(1950～)による精緻な木口木版「死と変容」第1集「夜」の全22点については県内の所蔵家からの寄贈である。

なお19年度新収蔵品のうち11点を、7月12日より11月9日まで開催されるコレクション展Ⅱの「ニュー・コレクション—新しい美術との出会い」に特集して展示予定である。また新収蔵の資料1件は常設展示内に記念室を設けている洋画家金山平三に関する写真アルバム等で、これについても同時期の展示で紹介の予定である。

(えがみ・ゆか／当館学芸員)



菅井汲《カドミウム・レッド3-4》1992年 アクリル・布 250×264cm

ムンク展関連行事

開館5周年記念「ムンク展」は、おかげさまで15万人を超すお客様に足を運んでいただき、去る3月30日、大盛況のうちに幕を降ろしました。ここでは会期中に実施した関連行事について報告します。

まず、開幕間もない2月3日(日)には、「ノルウェーの調べ」と題したコンサートをギャラリーにて開催しました。ノルウェーの民族楽器ハルダンゲルバイオリン奏者で本誌前号にエッセイをご寄稿いただいた山瀬理桜さんとピアニストの城綾乃さんをお招きし、ノルウェーの民俗音楽やムンクと同時代の大作作曲家エドヴァルド・グリーグの名曲を披露していただきました。用意していた300あまりの座席はすぐ埋まってしまい、立ち見も出るほどの人気振りで、会場はその後の展覧会の成功を予告するかのような華やかさに包まれました。

また、3月2日(日)には、本展を企画・監修された武蔵野美術大学の田中正之先生による講演会を実施し、ムンク美術の装飾性という本展のテーマについて詳しく掘り下げたお話を伺いました。従来、暗鬱なイメージで語られることの多かったムンクの作家像に新たな角度から光を当てた本展の意義をわかりやすい言葉で解説していただけたと思います。

さらに、小中学生を対象とした教育事業として、2月24日(日)に「こどものイベント:ムンクに挑戦!」を実施し、ムンクを真似たお絵かきにチャレンジしてもらいました。また3月22日(土)には、同じく「こどものイベント」として「ムンクの秘密?」を実施、「ムンク秘密手帳」と題したワークシートを手に会場を親子で巡り、ムンクの作品をじっくり鑑賞していただきました。

展覧会の鑑賞をより充実したものにす関連行事の豊富さは、当館の売り物のひとつです。今後の展覧会でも、様々なイベントをご用意して皆様をお待ちしておりますので是非ご参加ください。(岡本弘毅／当館学芸員)



麗しき「ノルウェーの調べ」に酔い痴れる

「美術館の日」イベント

当館では、来館者の皆さんが美術館をより近い存在と感じていただくために、毎年4月の第2土曜日を「美術館の日」と定め、様々なイベントを開催してきました。今回はさらなる充実を図ろうと、4月5日(土)と翌6日(日)の二日間に拡大し、コンサートやガイド・ツアーといった定番メニューや昨年に引き続いての彫刻デッサン会などに加えて、以下のプログラムを新たにご用意しました。

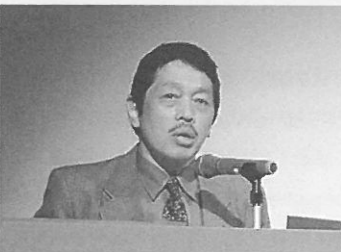
まず、美術情報センターでは、美術作家が手掛けた絵本を自由に読めるコーナーを設置、午前と午後の一、二回、各地の図書館などで活動が続いている「さつき会」による読み聞かせ会を実施しました。また、エントランスでは、「アートであそぼ!」と題し、フロッターージュの技法を使って生き物のイメージを作り出すワークショップをおこないました。これらは、現在開催中のコレクション展(本誌P.2～3参照)と同様に小さな子どもたちにも楽しみながら美術に親しんでもらうことを目的にしたものですが、子どもだけでなく親御さんにも好評だったようです。

さらに、北口の屋外コーナーではフリーマーケットを開き、神戸芸術工科大学の学生たちや神戸市立青陽東特別支援学校の生徒たちのオリジナル・グッズを販売してもらう場を提供しました。美術館の利用者同士に新たな交流が生まれる機会になったと思います。(岡本弘毅／当館学芸員)



ワークショップ「アートであそぼ!」に大集合!

「南画って何だ?! 近代の南画—日本のこころと美」関連行事



南画について語る佐藤道信氏

トピックス

「南画って何だ?!」展の関連イベントとして講演会を2本開催しました。

ひとつめは東京藝術大学准教授の佐藤道信氏による講演会(4月27日(日))。「南画にみる日本のアイデンティティー」と題し、明治から昭和にかけての南画の状況とそれが美術史の中でどのように位置付けられていったのか、その過程や社会的背景を中心にお話しいただきました。南画をめぐる様々な論点を押えた専門的な講演でありながら、整理されたわかりやすいお話に聴衆の方々も熱心に聞き入っておられました。

ふたつめは京表具の分野で長らく活躍され、今春黄綬褒章を受章された山本之夫氏による講演会(5月17日(土)・友の会との共催)。山本氏が手がけられた与謝蕪村や富岡鉄斎などの作品の表具を実際に見せていただきながら、絵と表具との合わせ方、裂地の種類などについてお話しくださいました。普段私たちは絵にばかり関心がいきがちですが、表具は絵の情趣や内容を伝える一助となり、いかに重要な役割を果たしているかを改めて実感できた機会となりました。

また、恒例となった子どものイベントでは「水墨画を描こう」と題したワークショップを行いました(5月25日(日))。墨のにじみやぼかしを生かして描く子ども、細い線で緻密に描く子どもなど一人一人の筆遣いに「個性」が現れており、最後は皆立派な作品を仕上げることができました。(飯尾由貴子／当館学芸員)

● 編集後記

●今号では、本年度最初のコレクション展「絵とはなそうーたんけん!はっけん!美術館!」と特別展「南画って何だ?!近代の南画—日本のこころと美」に関連したエッセイを掲載しました。いずれの展覧会も立錫の余地もないほどの大入り満員、というわけではないにせよ、アンケートなどを見る限り、足を運んでいただいたお客様のほとんどが大きな満足感を抱いて帰途に就かれたようです。昨今は美術館活動の評価の指標として入館者数や収支ばかりがクローズアップされる傾向にあります。もちろんそれも大事ですが、来てくださった人に満足していただくという基本に忠実な展覧会づくりを続けていきたいものです。(岡本)

兵庫県立美術館
quarterly report
ART RAMBLE
VOL.19

2008年6月30日発行
編集・発行:兵庫県立美術館
〒651-0073
神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1
印刷:(株)サンメディア

海の上で会いましょう

小林 公

美術館の周縁

元町駅から鯉川筋を上がっていったところにある旧神戸移住センターは、つい先日まではCAP HOUSEとも呼ばれ親しまれてきました。

CAP HOUSEは神戸を拠点に活動する芸術家たちのN.P.O.組織、C.A.P. (The Conference on Art and Art projects=芸術と計画会議)のこの建物を舞台としたプロジェクトの名称であり、建物の愛称です。1階に神戸移住資料室と人々が集うカフェ、2階に展覧会などの催しが開かれるギャラリー、3階と4階にC.A.P.のメンバーの公開アトリエ、と様々な機能を併せ持った旧神戸移住センター=CAP HOUSEはまさにアートセンターと呼ぶにふさわしい場所でした。このプロジェクトは、歴史の証人たる建物を現役の「場」として甦らせることで、そこに刻まれた記憶をも永らえさせる、そのような取り組みでしたが、建物の保存・改修工事に伴い2007年度をもって一旦終了となりました。

2008年の5月、C.A.P.の新拠点「STUDIO Q2」が誕生するという報を受け、実際にお邪魔してディレクターの下田展久さんにお話をうかがいました。

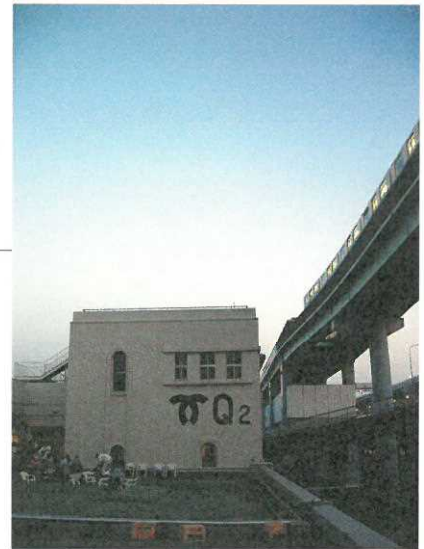
CAP HOUSEが山手にあったのと対照的に、STUDIO Q2は浜手も浜手、新港第四突堤の真ん中、神戸新交通ポートライナーの「ポートターミナル」駅に直結したQ2上屋という建物の中にあります。柱のない広々とした空間が印象的で、東西両面の窓からは海が臨め、まるで海の上にいるようです。

CAP HOUSEでの活動がひとまず終了しましたね。

— C.A.P.=CAP HOUSEではないのですね。試行期間を別にすれば、CAP HOUSEでの活動は2002年から2008年3月まででしたが、最初からブラジル移民100年の年である2008年まで、という約束を神戸市としていました。ですから予定通り、CAP HOUSEを出て行かなければならない、となった時、C.A.P.が活動のための場所をまた持つべきかどうかという話し合いも持ちました。そうした中で、たまたま神戸市の管理しているスペースが空くという話があったのです。それがこの場所でした。

CAP HOUSEには作家さんのアトリエや、展覧会などを開くギャラリーのようなスペースがありました。STUDIO Q2にはそういったスペースはないようですね。

— むしろ新しいこの場所でどんなことができるのか、考えていきたいと思っています。ここは両サイドが海に面しているとても面白い場所。展示をしようにも「壁がない」のですから(笑)。何かを展示する、というよりは人が集まる、そのことで何ができるかな、という風に考えています。例えば、ポートアイランドには4つの大学のキャンパスがあり、これからも整備されていく予定とのこと。そこに集まる人たちがSTUDIO Q2で何かと出会って、その出会いがまた別の面白い出会いのきっかけとなる、そんな出会いの場所にもなるといいなと思っています。色々な人が集ま



Q2上屋の外観。神戸市のマークと「Q2」の大きな文字が目印。ポートライナーの線路が隣接する。

るきっかけになれば「Q2 MEET UP」という連続イベントを計画しています。コンスタントに開催できると良いのだけれど。

皆さんが変化に対して前向きなのが印象的です。

— 「何にも決まりがない」のがC.A.P.の良いところなので。CAP HOUSEの時もそうでしたがC.A.P.の活動に興味を持ってくれる人、関わってくれる人、イベントに参加してくれる人、これからSTUDIO Q2を訪れてくれる人、そういう人たちによって、アーティストの活動の方向も変化していく。自分たちはそうあるべきだと思っています。逆に街の人もアーティストを活用する、なんてことを考えても良いのではないのでしょうか。

STUDIO Q2のこの場所を借り受けられるのは一年間ということですが、そのことも否定的には考えてはおられないようでした。C.A.P.の皆さんは、その場所で出来る面白いことを考えたい、と環境の変化を積極的に捉えているといいます。手に入れたものを手放すことを恐れない。面白そうなことをやってみる。簡単そうでなかなか難しいことです。それを自然体でやり遂げるC.A.P.の皆さんを見てると、あなたも一緒にやってみましょうよ、と背中をそっと押されるような気がしてきます。そんな人たちと出会う場所、彼らとともに過ごす時間が神戸の海の上で誕生しました。

「Q2 Meet Up!」などSTUDIO Q2でのイベントは次のHPで紹介されています。ご興味のある方は是非。 → <http://www.cap-kobe.com/q2/>

(こぼやし・ただし/当館学芸員)



東側に広がる景色。この先に兵庫県立美術館があるはずだが、残念ながら見えません。